

## 岩石・鉱物からみた素地土採集領域 長野県川原田遺跡出土土器の偏光顕微鏡観察から

Observations of Pottery Excavated from the Kawarada Site in Nagano  
Prefecture Using a Polarizing Microscope

### 水沢教子

はじめに

①分析の視点

②川原田遺跡周辺の地質

③野外観察からみた在地素地土候補の特色

④偏光顕微鏡観察による胎土の特色

⑤分析結果の総括と解釈のためのモデル

おわりに

#### 【論文要旨】

本共同研究において、筆者は川原田遺跡出土土器43点の岩石・鉱物の偏光顕微鏡による観察と遺跡周辺の地質学的な調査を通じて素地土の採取領域を検討した。その結果土器の胎土は主に鉱物の特色から大きく1群と2群に分かれ、さらにそれらの量比と岩石の種類から1群が3類6細分、2群が3類に分かれる。また、これらに含まれない特異な胎土も3群の3つの類に分かれた。

これらをそれぞれの土器型式とその細部技法から推測される産地と対応させた結果、焼町土器の胎土には大きく2種類、細別4タイプの岩石・鉱物組成がみられ、新道期(Ⅱ期)から井戸尻期(Ⅳ期)にかけて若干の数量的な偏りはあるものの、産地が異なることが予想される2種類以上の素地土を使い分けるという特殊な行動が明らかになった。また勝坂式には少なくとも、「在地外の型式を在地の人が在地の素地土で作った模倣製作」によるものと、「在地外の型式を在地の人が在地の素地土で作った土器の搬入」の結果遺跡内へもたらされたものがあり、阿玉台式にも同様に搬入の結果遺跡へもたらされた可能性が高いものが存在する。また今回の結果からは土器の移動が土器型式情報伝達の前提になることが予測された。同時にこのような分析の積み重ねが、当時の社会構造考えていくための糸口となり得ることが示唆されたと捉えられる。